



学生と表現能力

木 枝 燦

「実習目的——機械工業部門の実務に於いて、工作機械及び計測器の取り扱いについて、実習をすることにある。尚、今回の実習では、ミシン（家庭用）の部品製作、又その部品作製のプレス金型の作製においては、私は、その工程に於ける工作機械及び計測器の実習に主課題を置き、実際使われている工作機械で最も注意すべき点、即ち運転に於けるミスを体得する点にある。言換すれば、与えられた課題に対して、如何にミス無く、早く、課題をまっとうするかを研究することにある。」

右の文章は同志社大学工学部四年次生の学外実習報告書の発端である。この例は、試験の答案と言わず報告書と言わず、およ

そ現在の大学生諸君の書いた文章の典型的なものであり、手元にある報告書の中から選び出すのにわずかに三十秒を要したに過ぎない一例であつて、読者の意気を阻喪させる奇妙な効果をもっている。これを書いた学生は、提出期日に圧迫されて自発性と意欲を失い、行き当りばったり仕様ことなし筆をとったのに違ひなく、その点は現在この文章を書いている筆者と同じであるから同情を禁じえないけれど、もう少し何とかなりそうなものと思われる。

さて、同志社時報編集部から表題のような原稿の依頼を受けて驚きもし困りもした。筆者は流体力学の専攻者であり、この種のテーマに対する門外漢の代表的なもの

であるから、お断わりするのが当然であろう。そう思っているうち断わる機会を逸してしまい、準備もできないうち締切日が迫つて来た。漱石でさえも自分のインスピレーションは原稿締切日であると言つたそうで、期日が切迫したのはもはやいたし方ない。最も門外漢である点にむしろ力点を置いて、筆者自身の立場から思いつくままに筆を進めようと肚をくくつた。そのためにはなだ無責任な内容となるであらう点をお許し願いたい。

＊

まず表現とは何かと自問してみたが、このようなむずかしい問題にはおのずからむずかしい解答があるのだらうとしか自答で

きない。哲学の立場からも芸術の立場からも、あるいは心理学の観点からもそれぞれ立派な定義が準備されているであろう。悲しいかな工学の領域からは何の返答もない。

しかしあらゆる工学が目標とするところに設計図というものがある。工学部の学生諸君は与えられた性能をもつ機械や装置の設計図を提出する。計算書と図面を一目見ればその図を引いた学生の個性がわかる。自信に満ちた力強い作品もあれば、参考書まる写しの弱々しいものもある。内容の空虚なものもあれば充実しているものもある。美しいものもあれば汚いものもあり、間違ったのや他人のを写したらしいものまである。そこで設計図というものを手がかりとして筆者に与えられたテーマを何とか消化できないであろうか。

まず考えられるのは表現とは個性の発現であるということであろう。問題を「普通の人」の「表現」という行動に限ることにし、「芸術家」の「芸術的表現」については触れないことにしよう。また対話、議論、あるいは討論のような口頭で行なわれる表

現も除外する。その理由は限られた紙面をより有効に利用するためである。残されたものは文学的な目標をもたない文章や、論文、あるいは設計図面、計算書、手紙などである。そのような作品における作者の個性とは何であろうか。第一にその作品の内容は善きもの、正しきもの、更に美しいものでなければならぬ。すなわち作者の倫理的、論理的、美的な觀念が土台となっていなければならない。倫理的とはこの場合、作者一個人の独立人格の立場と、社会の一員としての社会的人格の立場の両方を満足させる最適な内容をもつということの意味する。また論理性というのはその内容が科学的であるということである。表現されたものは虚偽であってはならない。更にその作品はよく準備され、推敲され、意欲に満ち、力強く、簡潔で理解しやすく、一つた一つの意味が明確に汲み取られるものでなければならぬ。すなわち美しいものでなければならぬ。

筆者の接する学生諸君の作品は、独善に陥るかあるいは他人の見解の集約的なものであることが多く、その両面の調和に欠け、

特に報告書などでは自分の意見が何であるのか読者にはわからぬことが通例である。論理的な面について言えば、表現内容の客観的な把握力に乏しい。すなわち表現しようとするものを要素に分解し、どのような条件のもとにその要素を取り扱うのかの立場や条件を明確化し、無視できる要素を棄却し、改めて残りの要素をそれらの条件の下に再構成するという筋道を経っていない。その過程をたどることによって始めて自己の見解が発見され、真の客観性が確立されるのであるが、途中で労を惜しむために発見まで発展していない。ゆえにすこぶる説得力のないものに終ってしまう。要するに自分が発表しようという作品の内容が自分でもよくわかっていない。言いかえれば分析力、構成力、発見力がない。

この原因は作品を作るに当って労を惜しみ時間をかけていないことにある。およそ同志社大学の入学試験に合格する程であれば、知能指数は相当高く、中には一六〇に達するものもある。能力は皆もっているのである。しかし表現行動における効率——作品の出来栄え（具体的には点数）と支払

ったエネルギーの比——ばかりを意識し過ぎて最小のエネルギーで済ませようとする点があまりにひどすぎる。およそ創作活動においては結果が重要であって、いくら支払ったエネルギーが少なくとも作品が駄目であるならばその小さなエネルギーさえ役に立たなかったことになる。創作活動における人間の仕事は、機械がする仕事と違って効率はさして重要なものではなく、無駄と思われるエネルギーを注ぎこまねばならない。そのためには労を惜しまず十分時間をかける必要がある。なぜかと言えば人間の仕事は着手してすぐ最大の能率で行なわれるのではなく、時間と共に能率が上昇し、一定値になるまでかなりの時間を要するからである。人間の仕事は始動に時間がかかるのである。そのことはプロ野球の投手を見ればよくわかる。個人差もあるであろうが、十分時間をかけて想を練ることをくり返し訓練するうちに、始動も早くなり仕事のスピードも増加するであらう。

さて次に、表現された作品の美しさという点について考えてみよう。いくら内容が良きものであり正しいものであっても、表

現された結果が魅力のないものであればならぬ。この「美しさ」は内容の把握力にも関係することはもちろんであるが、表現の技術によるところも大きい。文章は文章として、手紙は手紙として、あるいは設計図は設計図としての目的があり、その目的に対して十分機能を発揮するものでなければならない。作者には完全にわかっていることでも、他人が理解に苦しむようなものでは役に立たぬ。冒頭に引用した報告書はよく読めば理解できるのであるが、全く文章としての魅力がない。読者がひきこまれるような力を全然もっていない。機能的でない文章の代表的なものである。最近は何にでも工学を付けるのが流行のようで、人間工学などと呼ばれる分野が開拓されているが、文章工学という言葉も用いられているようである。これは機能的な文章の書き方の科学を意味するもので、面白い企てである。

*

表現についての技術面は、思うに初等教育における訓練の不足が大きなマイナスになっているのではなからうか。一般的に言

って小学校教育において文章の綴り方があまり重要視されていなくて、むしろ詩の方が重要視されているような気がする。それはそれで大いに結構であるが、機能的な文章の作り方も義務教育の過程で十分訓練する必要があらう。

そのせいかどうか確言できないが、学生諸君の文章には実に誤字が多い。面白いことに米国でもスペルを間違う大学生が時々あって、ルーズリーフを買うと間違いやすい語のリストが挿入されていた。例えば次のようなものであって、むしろ日本の大学生ならば間違わないと思われる。つまりわれわれにとっては生きた英語の発音のむずかしさを表わしている語である。すなわち column, describe, dictionary, environment, minimum, resistance, secretary などにおいて、アンダラインの部分間違うのである。

誤字と共に不適当な用語の使用も多い。つまりボキャブラリの不足である。大学生ともなれば、当用漢字と現代かなづかい

は既に卒業しているはずであり、表現の力強さ、簡潔さのためには当用漢字の枠外の漢

字をある程度用いてもよいと思う。そのため格式張ってかえって品を落すことになっ
てはいけないが、冒頭の引用文のような幼
稚さは何としても大学生の品位にかかわる
ものである。余計な漢字を覚えることはエ
ネルギーの損失であるという意見が多いよ
うであるが、筆者は戦前の程度くらいに漢
字を覚え、字を書く練習をすることはマイ
ナスよりプラスが大きいと信ずる。第一の
理由として日本でも英語国においても、英
語のスペルを覚えることには相当時間をか
けていること、第二には漢字の練習は指先
の訓練であり、幼少期における指先の訓練
は頭脳の訓練に大きく役立つことである。

その証拠に漢字を用いる民族は知能の程度
が相当高く、その上器用である事実があ
る。折にふれて中国人はくるみの実を二個
掌中にもてあそぶ由であるが、これは間接
的に頭脳の訓練をしているのである。近頃
幼い女の子がおはじきをしているのを見か
けないが、淋しい気がする。

文章は一つただ一つの意味を明確に伝え
るものでなければならぬ。意味を汲み取
るために読者に迷惑をかけてはならぬ。そ

ういう意味でも文章は倫理的、社会的なも
のであり、ひとりごとやうわごとのような
自分だけがわかる、あるいは自分にもわか
らないようなものではないかともし難い。

それには文脈の構成法に問題があり、日本
語はその点英語などの欧米語に劣る。修飾
する部分は必ず修飾される部分に最も近く
置くべきであるが、日本文ではそれが実行
し難く、どれが何にかかるのか明確でない
ことが多い。また、既に指摘されているこ
とであるが、日本文の複雑さは文の主流に
入りこむ順序正しくない支流が多すぎるこ
とで、英文と比較すると下図のようになる。

この複雑さを避けるためには、文章を短
かくし、挿入句のようなものは括弧や
でくくり、文章は必ずそれ以前に理解され
ている事柄の上に立って始まるべきであ
る。相当読み進んでから以前の文章の意味
が理解されるような構成は科学的ではない。
この点で美的な面が失われることがあ
っても、文学的作品ではない機能的な文章
においてはやむを得ない。わかりやすいと
いうことも一つの美しさであると解すべき
である。

＊

さて、与えられたテーマは学生の表現能
力についてであった。能力というのが可能
性——潜在能力——をも含めて言うものな
らば、既に述べたように学生諸君は開発さ
れるべき表現能力を十分もっている。例え
ば卒業論文のように努力を傾け時間をかけ
た作品には立派なものも多い。しかし現に
提出されている結果——作品が何点を与え
られるかということ——をもって能力を判

断するならば、次のよ
うな式によることを提
案したい。すなわち、

能力 = 分析・構成

・発想

× 読

解 (読解)

× 読

解 (読解)

× 読

解 (読解)

× 読

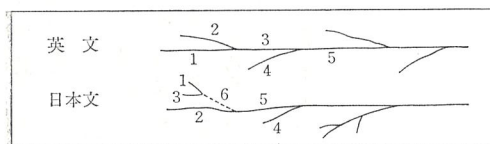
解 (読解)

× 読

解 (読解)

× 読

解 (読解)



である。「率」と書いた
のは1に対する割合と
いう意味で、左辺の表

現力も実は表現率とすべきであらうが、かえってわかり難いと感じられるため右のように記した。この式を用いて筆者の知る範圍の学生諸君の平均的表現能力を採点すれば、内容把握率〇・五、説得率〇・八、技術率〇・四、結局三者の積で僅か十六点となる。少し点数が辛いかも知れないが、大体蒸気機関車の熱効率であるので諒としてほしい。ついでに筆者自身のこの文章を採点すれば、まず五十点くらいであらう。本当はもう少し考える時間がはしかつたのであり、提案した式は別の機会に改めることを留保しておきたい。

表現力が上記のような式で与えられるとすると、読者の受ける効果はおそらく表現力の対数に比例することになるであらう。そうなるのかどうか、また上記のような表式は既に研究済みのものであるのかどうか、読者諸賢の御教示を得れば幸いである。

＊

最後に、筆者自身この文章にどうにも我慢できない点があり、読者もそうであらうから、除外したはずの文学作品の中から「澤東綺譚」の一節を引用して気分をさっば

りさせたいと思う。

「四五日過ると季節は彼岸に入つた。空模様が俄に變つて、南風に追はれる暗雲の低く空を行き過る時、大粒の雨は礫を打つやうに降りそゞいでは忽ち歇む。夜を徹して小息もなくなつて降りつゞくこともあつた。わたくしが庭の葉雞頭は根もとから倒れた。萩の花は葉と共に振り落され、既に実を結んだ秋海棠の紅い茎は大きな葉を剥がれて、痛ましく色が褪せてしまつた。濡れた木の葉と枯枝とに狼籍としてゐる庭のさまを生き残つた法師蟬と蟋蟀とが雨の霽れまゝに嘆き吊ふばかり。わたくしは年々秋風秋雨に襲はれた後の庭を見るたび／＼紅楼夢の中にある秋窓風雨夕と題された一篇の古詩を想起す。

秋花慘淡秋草黃
耿耿秋燈秋夜長
已賞秋窓秋不盡
那堪風雨助淒涼
助秋風雨來何速
驚破秋窓秋夢綠

………（創元文庫版）
文学作品であるので先の式の適用外であ

るが、読者は現にまざまざと秋の来るのに対面しているような気がするし、古詩の引用によって更に描写が生き生きとしてへる。引用は正にこのようにありたい。実験の報告書などもこのように魅力あるものであれば、書く方も読む方もどんなに楽しいことだろうと思う。それと共に、学生諸君がよい作品をよく読んでくれたらと不満を感じることも多い。

（工学部教授・流体力学）

